

## 大学教育再生加速プログラム(AP) 中間評価結果

整理番号	5	大学等名	徳山大学
テーマ	テーマ I アクティブ・ラーニング		

### 【総括評価】

A：計画どおりの取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる。

### 【コメント】

<優れている点>

- ・授業のアクティブ・ラーニング（AL）度把握・評価システムが開発、活用され、教員がその効果を把握し、授業改善に向けて定量的な目標を設定することが可能になった結果、教育改善につながったことが明確に示されており、取組は着実に進捗している。また、教養ゼミにおける「合同発表会」や「合同ディベート大会」の定例化、地域ゼミの必修化、といった地道な努力が続けられていることも高く評価される。
- ・AL 事業推進の中心組織である徳山大学 AL 研究所（TUAL）の創設は、AL を活用した全学的教育改革を進めるための中心的存在であり、将来的な大学進展に大きく貢献すると考えられ、評価できる。
- ・授業アンケートなど学生からの意見をフィードバックしていくことは教員の意識改革を進める上で有効である。既に BAL（Barometer of Active Learning）値を用いた授業の AL 度評価では「学生の AL 参画度自己評価」も教員の自己評価に重ね合わせて可視化できるようになっていることは評価できる。教員の授業改善への取組を積極的に評価する仕組みで FD への取組を後押ししていただきたい。

<改善を要する点>

- ・教員への動機付けとして、授業の BAL 値を教員の教育業績評価に反映させようとしているのは、本末転倒ではないだろうか。授業の AL に対する取組状況は BAL 値の元となる 6 つの指標（観点評価）のレーダーチャートにより可視化されている。これに基づき真摯に改善に取り組んでいる教員もいるはずであり、その努力を評価するシステムを構築する必要がある。教員の意識改革は、どの大学においても難しい問題であるが、より良い解決方法が望まれる。
- ・申請書では外部評価委員会の毎年 2 回の実施と相互授業参観、AL 研究セミナー参加等が記載されていたが、中間評価調書では評価委員会も形骸化しているような印象を受ける。PDCA サイクルという観点から、何に関する定性的調査をどのように行い、何が明らかにされたのかを明確化する必要がある。
- ・BAL システムの改善・保守、ルーブリックの CASK のシステム開発費、ホームページ制作・改良を外注に頼っているが、改善・保守・開発は、大学のミッションをも含みながら学内で議論を重ね、実施する方向で再考する必要がある。